

いわゆる「裏日本」の形成について

——歴史地理的試論——

千 葉 徳 爾

△—▽

地域によって、経済的な進展が程度を異にすることは、はやくから経済史の人たちが、いわゆる先進地域と後進地域として注目したところ です。しかし、そのような差が、どのような理由によって形成されるのか、という問題になると、あまり目新しい論議もなく、まして、方向を異にした地域経済の進みかた、といったものがあつたかどうかということになる、ほとんど考えられていなかったかと思ひます。

たとえば、ここで取上げようとする「裏日本」などという存在は、明らかに明治以前にはなかつた概念なのですが、そういう地域がいつ、どのような事情のもとに形成されていったのか、などがその一つです。

日本ではじめて「裏日本」という言葉を使ったのが、誰だつたか、その場合に、どのような意味で「裏」といわれたのかについては、私はまだ審らかにしていません。しかし、明治三十年代には、もう、この言葉がかなり一般的に使用されていたことは、一九〇六年に出た山崎直方・佐藤伝蔵両氏共著の「大日本地誌」第五巻の北陸地方の総論第一行に、この地方を「裏日本の海岸」と規定しているのでも明からず。この当時の「裏」という概念には、まず日

本列島の弓なりの形から、太平洋側を円弧の外側とみなし、日本海側を内として、内側すなわち裏という発想があつた(1)ようです。それが内帯日本にならなかつたのは、用例からみると内陸との混同をさける意味と、この地方の海岸が冬の北西風にさらされ、深雪に閉じられた生活をおくる点で、日本の家屋が一般に南を表、北を裏としていることに類推されるものがあつたかと思ひます。すくなくとも、この名称はもとは地域の自然的な性質を考へてのもので、いまの用例のように、表日本の「太平洋ベルト地帯」などと対比しての、経済的におくられた、みじめな生活をおくらねばならぬ地域といったイメージは、まったくふくまれていませんでした。なぜならば、「大日本地誌」第五巻は次のように述べているからです。

蓋し、本巻取むる所の北陸地方は、其の面積の点に於ては奥羽・中部（静岡・山梨・長野・愛知・岐阜各県）等の諸地方に如かず。其の人文發展の上に於ては近畿地方に如かざるも（中略）、豊沃なる平野の一方に幾多の瀾湖存在し、北越地方の地層中には本邦随一の石油を包蔵し、其の他佐渡の鉱脈、福井の羽二重等の如き、其の産業の性質、歴史習俗の点に於て、謂はゆる北国固有の特性を發揮するもの決して少なからず。」

これは、地域としての特殊な生産物があり、生活上の慣行があることを認めてはいますが、それは資源分布や自然条件のちがいにみとづくもので、いわゆる表日本に対する経済的な低開発性とはみとめられていないのです。

第一表にみられるように、明治三十六（一九〇三）年、つまり日本の産業革命がはじまって間もないころの、北陸四県の面積と人口および工業生産額の合計数値は、数字としてみる限り、中央高地をへだてた南側のいわゆる東海地方三県の面積と人口および産業のそれと、ほとんど同じ状態を示しています。工業生産をみると、当時発展しはじめた製糸業をあらわす生糸の生産量については、北陸は東海に及びませんが、それを利用加工する絹織物、ことに羽二重・白絹・明石などの生産はいちじるしく、東海地方の綿織物・陶磁器・和紙など、北陸地方にまさる生産額

第1表 産業革命期の東海・北陸地方の工産比較

		生糸 (重量)	絹織物 万円	綿織物 万円	陶磁器 万円	漆器 万円	紙		面積 (明36人口)
							和	洋	
北 陸	明36	9.4	1259.0	191.1	36.6	117.1	3	—	2.4933km ²
	大2	12.6	—	356.7	73.2	258.3	120	27	(394.7万人)
	大10	16.0	18558.3	1930.1	274.8	749.3	248	447	158人/km ²
東 海	明36	12.7	193.9	997.7	324.2	66.4	167	—	2,3568km ²
	大2	47.6	—	3050.4	957.5	119.8	247	629	(381.8万人)
	大10	110.1	1820.9	15536.0	3118.1	243.5	794	1987	152人/km ²

(註) 北陸=新潟・富山・石川・福井の4県の区域、東海=静岡・愛知・岐阜の3県の区域

をもつものの総計を以てしても、なお及ばぬ生産額を誇っていたのです。そのほか、漆器・鳥の子紙など独特の工産物があって、化学製品や機械金属類の生産が乏しかった時代には、むしろ東海地方にまさる工業地をもっていたといつていいのではないのでしょうか。

「大日本地誌」もこれを裏書きするように、

「本地方は工業の盛なる、近畿・関東に如かずと雖も、其の製造産出の種類亦た少なからず。殊に将来に於て発達の見込あるもの多くして、往々本邦有数の工業地を以て目せらるる所なきにあらず。」
としています。

その上に農業生産として、米の生産量が六一七万石と、東海地方の四四四万石を絶対的に引はなし、反収も新潟県をのぞくと二石内外と、当時の日本としては最高の収量をあげています。これも愛知の一石七斗、静岡の一石四斗などとくらべて、はるかにゆたかな生産力を示していました。このような経済的優位が、都市の分布や人口密度に反映していると考えれば、この年の人口密度が北陸地方により高く、名古屋をのぞけば主要都市の大きさや機能においても、北陸地方の劣っている点はみとめられないのです。

ところが、第二表にみるように、昭和の初期、第一次世界大戦後

第2表 1931(昭6)年生産比較

		北陸地区	東海地区
		万円	万円
生糸		1153	6593
絹織物		12458	1747
綿織物		1258	13876
陶磁器		97	3583
漆器		527	506
	紙	894	1937
(小計)		16382	28242
ガラス		19	18
時計		—	104
石		9	82
マツチ		6	28
植物油		37	643
綿糸紡績		1209	8347
メリヤス		10	787
人造絹糸		—	192
小麦		146	1046
罐詰		12	51
工業薬品		992	423
肥料		1694	477
(合計)		4134	12661
人	口	万人 411	万人 563

第52回日本帝国統計年鑑による。

の世界的恐慌の中で、地域的には、生産の大きい地方の活動がややにぶつたとみられる時期においても、すでに北陸地方の立ちおくれはかなりのつきり認められます。第一表にあげた在来工業の品目だけについてみても、東海地方の綿織物の地位がかつての北陸地方の絹織物にとって代り、陶磁器・紙類の生産がこれに加わって、在来工業品の伸びだけでも、東海地方は北陸地方の二倍近くになるのです。その上に、産業革命の進行にもなって新らしく加わった工産物が、いずれも北陸地方のそれと比較してはるかに多いことがわかるでしょう。ただ、ちよつとことわつておきたいのは、これを、いわゆる近代工業の立地に適したところが東海地方に多く、北陸地方には存在しなかつたといつた説明では、解決できないのではなからうかという点です。それは、化学薬品・肥料などの生産はむしろ新潟・富山

などの諸県に多く、しかも満州事変がおこる前ですから、日本海側に有利な原料や販売市場といった条件も加わっていない時期でした。これは、いわゆる工場立地において、北陸が東海地方に劣っていないことを示すものでしょう。

要するに、両地域の経済的差異の形成は、明治年代の後半から大正の末年までの、日本の産業革命の進行期にあったという点は、まず妥当なみかたと申せます。そして、第一表の各時期を通じての生産額の動きを対応させてみれば、この格差は急激にあらわれたものではなくて、ジリジリとその姿を明らかにしてきたもののようなのです。たとえば、機械漉きの洋紙類の生産は、明治三十六年には両者共になかったのですが、大正二年には東海地方にあらわれ、大正十年になって動かしがたい地域差をつくります。これは主として富士山麓に発達した洋紙工場群の活動によるもので、⁽⁴⁾東海道線や富士身延鉄道の開通が、新しい工業地形成に好条件をもたらしたといわれます。⁽⁵⁾しかも、東海道線の全通からわずか五年おくれた、福井市までの北陸線開通によって、この地方の和紙生産にあまり影響が及ばなかった理由は、どう説明すべきでしょうか。

△二▽

いうまでもなく、工業を中心とする地域的な経済活動の発展については、これまでもかなり報告されています。たとえば、愛知県の毛織物業については、先進的な他地域の綿織物に圧迫されたこの地の業者が、明治の末年に着尺セルの商品化に成功したことが重要な理由とされています。⁽⁶⁾しかし、なぜ、その他の後進的な綿織物業地、たとえば、北陸で新潟県の亀田、富山県の福野などには、この技術なり努力なりがみられなかったのでしょうか。それは、他の競合地に先んじて、偶然尾西織物がかんだ幸運にすぎなかったのでしょうか。私などは、むしろこの地の機業

が、地域的に普及した企業意欲の上に立ち、技術の普及一般化がきわめて容易であつたことに、発展の基盤を求められはせぬかと考えます。

また、愛知県の陶磁器工業については、瀬戸地域に尾張藩の指定商人による販売体制が存在していたことが、その発展の一因とみなされているようですけれども、⁽⁷⁾逆に多治見地方の陶器生産では、そのような制限が発展の障害であり、その撤廃が美濃焼の伸びた理由となつていふという説明もあつたのです。⁽⁸⁾私などのように、この方面に知識のないものには、どちらを信じてよいのか、それとも地域ごとの特性としてそれぞれが正しいのか、まったくわからなくなるのです。だから、私は、むしろ、愛知県内の陶磁器生産額の増加については、在来産地である瀬戸においてよりも、新興の生産地として、技術的革新にも、資金導入にも便利であつた、名古屋地域の発展が、大きな影響をもつと考えるのです。新興産地が新生産方式の採用に円滑な過程を示すという指摘は、⁽⁹⁾重要であり、追求されるべき課題でしょう。伝統をもつ生産地では、新しい方式を忌避したり、導入しても部分的にすぎないことが多いのは、窯のよるな固定資本が多い陶磁器生産ばかりとはいえないようです。明治以後の岐阜ちりめん生産地も、存来の岐阜市および加納町から、西方の鏡島村に移るのですが、⁽¹⁰⁾この場合にも類似的事情がひそんでいたのではないのでしょうか。

北陸地方の事例としては、明治以前から越前地方に漆液の生産が多く、漆器製作地が各地にみられたのですが、明治中期以後に資源としての漆液の減産にもかかわらず、それまで無名の河和田・片山などの漆器産地が出現しました。これも輪島や山中など他地方の技術を進んでとり入れたためだ⁽¹¹⁾そうです。また、この地域の羽二重の生産は、第五回内国博覧会の評価にも「福井・石川・富山・福島の優等品に至りては、従来の組織機械法に拠りては最早極度に達したるが如し」とまで賞讃され、全国第一位の発展をとげましたが、この地域も、実は明治のはじめ士族の手内職

から急速におこった生産地で、明治八年にフランス式の機械をとりいれ、新らしい洋傘やハンカチーフ地の輸出向生産をねらったことが、盛大におもむく大きな原因となったといわれます。このような、伝統にしばらくられない自由生産のびたという、より具体的、直接的な事情として、私が推測しているのは、福井羽二重の発展の初期において、年季徒弟の制度が、当時の他地方のそれに比べればゆるやかなものであつて、自宅通勤者が多かつたといふ(13)あらわれかたに、もとめられるように思うのです。

東畑精一氏は、このような傾向を明治以後の農業についても認め、その理由として、新らしい資本主義的経営を發展させるためには、従来の生業の伝統をそのまま継続維持しようとする勤勉 (*Diligentia*) な態度よりも、新らしい生活を創造しようとする才覚 (*Industria*) の精神をもつ人間がより適していたと論じています。(14) プリンクマンも述べているように、企業の成立には地域の自然的条件や販売市場への距離とならんで、経営のための技術や能力の状態が重要な要素です。これまでの地理学では、多くの場合にその検討があまり充分とはいえなかつたのではないでしうか。もちろん、単一の経営体については、その成功は偶然に支配され、環境の力がより大きく作用する場合も多いわけですが、技術や信用が、教育の普及指導によつて住民全体の保有するところとなれば、それは一つの組織された社会的条件として、環境に対応し、進んでそれを処理改変する力 (*Behaviour*) ともなるわけです。このような存在はずでに偶然的な性格を失ない、地域的な作用とみなすことができるでしょう。

この見解には、二つの反対が予想されます。一つは、人間の力に差異をみとめることは、差別観念を植えつけることになるという、もつともらしい意見で、これはいわゆるスクール ジェオグラフィを教壇で説いておられる方から出ると思います。たしかに、そのような問題を教材として扱うのは、心すべきことですが、地理的研究は教育手段と

してのみ価値があるわけではありません。地表事象に地域によるちがいをみとめる限り、地域の住民の活動のある面において、ある時期の、一定の条件のもとで、何かの技術や知識、あるいは信念などの理解や実践行動がちがっているということは、認められない方が不思議なことではないでしょうか。

いま一つの反対は、主として方法論についてのもので、そのような差異をみとめるとしても、それをどのように実体としてとらえるのか。解釈しだいでどのようにでもみられるような事実では、科学的研究の対象にならないのではないかという意見です。なるほど、住民の能力のちがいといつては、きこえもよくないし、とらえどころのないものようですが、実は、これは具体的な形としては地域社会における生活目標あるいは規範として、住民がその態度を選択する基準をそれぞれ異にしているという点にあらわれています。マックス・ウェーバーが、プロテスタントの居住地域に工業の発達がいちじるしいことを指摘するとき、それは資本主義的企業についての価値判断が、カトリック教徒の住民とは態度においてちがったものとなることをいっただけでした。一つの時代の変動期において、新しい生活方式を進んでとり入れるが、反対に、拒否して伝統を保持しようと努力するかによって、地域の住民はその生活方向を選択し、判断し、決定しているわけです。このようなあらわれによって、私たちはかなりの程度にまで、住民のものの見方、考え方をとらえ得るのではないのでしょうか。

いうまでもないことですが、この場合にも地域社会の指導的立場にある者と、指導をうける住民との力関係といったもの、つまり社会の組織や構造によって、そのあらわれかたにはさまざまな形態がありました。だから、研究は複雑であり、困難なものでしょうが、不可能ではないと思うのです。

結論から先に申しますと、産業革命期の日本海沿岸地域が、自然的な意味ばかりでなく経済的にも裏になっていく

過程を調べていく場合に、自然的な気候や資源における不利、交通のおくれなどとならんで、地域社会の近代化への志向が、東海地方とは異なっていたのではないかとこの観点を加えてはどうかと提案したいのです。その理由は次に述べていきますが、この点で私は、歴史地理学にきわめて接近した方法をとっていた、初期の民俗学開拓者柳田国男先生の考えかたが、応用できるのではないかと考えております。⁽¹⁵⁾

△三▽

まずとりあげたいことは、北陸地方の最大の生産物として住民の志向した米作が、社会制度としてはおくれた形態である、寄生地主制と不可分の関係をもっていたことで、それは大きな経済的弱点として作用しました。表面上の生産量の増加にもかかわらず、こうした矛盾を含む制度は、やがて生産の障害となるものだからです。すでに明治四十年代に柳田先生は次のように指摘していました。⁽¹⁶⁾

「全体、地主が人に農業をさせて置きながら、改良の必要を唱へるのは手前勝手の話で、小作人と休戚を共にするやうな昔風の地主ならば兎も角も、所謂不在主義の地主が之を説くに至つては、不条理の言たるを免れませぬ。要するに小作料米納の慣習の下に、米質改良策が効を奏せないのは当然であります。故に恐ろしい法令の力を借りるのです。」

明治四十二年に、先生は石川県の石灰施用状況について、旅行日記に次のように記しています。⁽¹⁷⁾

「紫雲英は大分作る。是と石灰施用との良好なる関係は注意に値ひす。従つて石灰を使つたばかりに牢に入れられて居た天草の農夫を愈々気の毒に思ふ」

耕地に石灰を使用する者を処罰することは、農民の非常な不満にもかかわらず、⁽¹⁸⁾明治三十年代の各県でしばしば制定された所で、その理由は地盤を固くし、米質をもろくすると信じられたことにありました。⁽¹⁹⁾石川県でも県令でこれ

を禁じ、違反には拘留もしくは料金を規定しています。これはむしろ生産を妨げるものであったことは、先生が同県農試の成績を引用して、

「酸性土壌に石灰施用の有効なることはもうきまつたと見て可なり。無差別なる禁止罰則は、農民に対し申しわけのないものであった。」

と記している通りでした、小作米を売って利潤をあげる地主によって、生産がさまたげられている実例です。

このような生産を選択した北陸地方の住民指導者層は、産業革命期における動力採用傾向についても、極めて保守的な志向を示しました。

たとえば、両地域の経済的な発展ことに工業化のちがいを決定的にしたものは、さきの第一表からも、第一次世界大戦当時の増産態勢であろうと推察できるのですが、その当時の北陸地方四県と東海地方三県との、工場企業の新設および拡張状況を、農商務省商務局の調査からうかがったのが第三表です。そこにみられるのは、新設、拡張共に、東海地方が断然北陸をひきはなして多い事実です。ことにその一工場当り投資額や工員数の多い点は、企業者の意欲ごみを反映するものと考えられます。もちろん、その中には、基礎が不十分で戦後の調整期につぶれたものも多いでしょう。また、資金や労働力の点も考えねばなりませんけれども、両地域の企業者の、さらにはそれらを援助する住民中の有力者層の志向や意欲が、ちがっていたのではなからうかと考えさせる資料とみてよいでしょう。

この空前の好景気の時代に、工業への意欲が北陸地方で意外に低調だった一因は、米作農業の相対的高成長の予想ではなかったでしょうか。時代はちょうど米騒動の前夜であり、まだ小作争議はさほど高潮期に達せず、米価の高騰がこの地方の指導的階層、すなわち有力地主層の関心をひいていたと思われるからです。しかし、農業については資料不足でもあり、別稿にゆずって、ここではやはり工業生産の面からながめていくことにします。

第3表 第1次世界大戦中の工場増加

	新 設 工 場			拡 張 工 場		
	工場数	工員数	投資額	工場数	工員数	投資額
新 潟	180	3,623	112.1	134	2,701	182.8
富 山	85	2,377	131.8	19	623	63.1
石 川	163	3,656	140.8	37	781	18.7
福 井	56	2,037	13.6	48	2,763	50.9
合 計	84	11,693	570.8	238	6,868	315.5
愛 知	551	16,652	1484.8	328	8,251	450.0
静 岡	346	7,155	1009.6	135	6,621	203.4
岐 阜	56	2,810	124.2	247	1,443	61.5
合 計	953	26,617	2618.6	710	16,305	714.9

大正6年商工局調査ニヨル。大正3年3月以後大正6年10月迄ニ新設又ハ拡張シタル工場ニツキ調査セルモノ。拡張工場ノ工員及ビ投資額ハ拡張後ノモノノミヲアゲテアル。

このころ、柳田先生は美濃から越前へ、山間地の産業としての和紙生産を視察しておられます⁽²¹⁾で、それを利用して、東海地方における美濃紙と、北陸地方における越前和紙との、生産者の意識あるいは志向するところを対比してみましよう。

「中央製紙株式会社といふは恵那郡に工場あり。御料林と其附近の針葉樹を利用して自らバルプを作る(中略)。此会社の主たる製品は所謂ロール半紙、原料は木材。ツガ・マツなど。ボロは新聞紙以外にはあまり使はず。書院紙にもバルプを使ふ。此のバルプは独逸からの輸入品なり。最上品でも一割はこのバルプを入れ、粗なるものは半分も入れるといふ。其の理由は競争に在り。つまり他府県より安いものを出さうとして此の如し。」

ついでに記すと、この会社は中津川市に現存し、当時資本金五〇万円、工員二〇〇名、一四〇〇馬力の水力を利用して機械製紙工場で、年産は五〇万円でした⁽²²⁾。これに対して美濃和紙は全体で約一五〇万円の生産があり、上有知から上流、ことに牧谷を中心としていましたが、原料は主として高知県や中国山地のものを使用し、岐阜がその取引集散の場所でした⁽²³⁾。

「県内の原料は甚だ足らず、他府県の移入多し（中略）。勞力多くして材料乏しき為、材料費を節約して勞力を以て之に代へんとする傾きあり。たとへば蛇目傘は粗薄の紙に墨を塗り糊を付け、一見丈夫に見する故に、色漉きの紙を用ひて勞力を省かしめんとするも事行はれず。粗製濫造は、要するに競争の激しい時代には、之を生産者に責むること能はず。」

和洋紙をとわず、激しい競争に直面して、原始的粗製濫造で対応しているのが、東海に向つた企業地としての岐阜県の現実でした。それというのが和紙原料の楮・三極の栽培は、養蚕にくらべると利益が少なく、この地方では自家附近の山畑に桑を植えて養蚕の便をはかり、楮・三極の畑はしだいに消失しはじめていたのです。この地方の住民が利害の金銭計算にかなり熟達していたらしいことを、上記の資料から推定しても誤りとはいえないでしょう。それにくらべて、北陸側の住民はどのような態度を示したてでしょうか。

柳田先生は郡上八幡、白鳥を過ぎ、油坂峠をこえて九頭竜川の流に沿ひ、大野郡の山間の製紙地をみて歩きました。

「(下六馬)此村昔からの帳面紙を今も製して居る。火事の危急に井戸の中へ投込んで立退き、暫くたつてから引上げても少しも損せず居るといふ紙で、京大阪の商家の大福帳は多く爰へ注文する。下山及び山大納の部落にて冬中之を製す。他の大字にも始めた者はあるが永続せず。三極の栽培も起りたれども、土地の者は楮を大事にし、路傍の畑にもまだ楮多し。大よそは村限りの原料に供して昔風な漉き方を守り、新種を作らうとする考へはまだ起らず。」

これだけの資料では、この土地が大野の町から九里も奥で、交通が不便なために新しい變動の波がおしよせないのではなからうかという気がします。たとえば、大野町から四里しかない上庄村下若生子などでは、やや交通の便があり、

「山中ながらあまり雑穀を食はず。それというのが冬季の生業として紙漉きがある為にて、此辺にも少々の楮はあれども、多分は隣里より買ひ来りて之に加工す。所謂帳紙なり。」

というように、原料購入の形態がでてくるのです。

「西ノ谷村は大字十一あり。其うち二を除くの外は皆紙を作る。純然たる昔風の帳紙なり。大野町の商人の言に三万円なければ西ノ谷の紙を買占むる能はずと言ひしも、今は是より少し減じたるやう也。(中略)一戸五百貫の黒皮を潰すと云はば、紙百貫目余を産することになる。一貫の相場今年は二円八十錢位といふ。黒皮の大野町から運賃は、雪の時なれば十貫三十錢ばかり、紙の製品を送り出すのは一九(一貫三百目位より一貫五百目まで)二錢から三錢かかる。車道が通ずればこの費用半減すべしといへり。」

西ノ谷は大野から一〇里、交通の不利にもかかわらず、原料を大野から運び入れるというのはどういうことでしようか。それは出稼と関係するようです。

「(上庄村) 壮丁の一半は今も鉢夫として出稼し「昔鉢山があつた時代に遠くから移住して来た者が定着したと伝えられる」毎年郷里に送金し来る。其行先は、面谷その他近郷の山だけに限らず、足尾にも行き又台湾にも行き、弟や次三男の如きはめつたに還つて来ず。」

「西谷村の下笹又といふ処まで来て憩ふ。此家の亭主は、今、足尾鉢山に行き飯場頭をして居る由。此村も上下若生子と同じく鉢夫出稼ぎ多く、村に現金が入り女子供のみ多い処。」

つまり、東海地方の山村が桑を植え、養蚕にたよつて現金収入を得ようと努力するのに対して、この地域では出稼で現金収入があるために、養蚕はさほど盛んではないらしいのです。そうして、もつと大切なことは次の記載です。

「此村の紙、三程などを入れて色を白くし改良させんとしたりしに、従来の消費者之を承認せず、仲買等大失敗を為し、それに懲りて再び昔風の丈夫な紙を作るに至れり。」

これはつまり、京大阪の商人の実力がまだ極めて強力であり、その需要に依存したこの地域の生産組織が、古い技術や道具では能率の低い女子や老人の労力を主としたために、大規模專業に進み得なかつたので、消費市場を新らしく開拓するほどの実力をそなえていなかつた結果のようです。この調査の二年前に、同じく先生が見た越前奉書の産地岡本についても、⁽²⁴⁾

「古くよりの工人村に住む。近頃大いに機械を入れる。手漉きなれども他の準備作業はすべて機械なれば、容易ならぬ固定資本なり「この機械は蒸気機関を原動力としたもの」。堅い鳥の子のやうな紙、昔風の檀紙奉書の類は今もなほ家々にて作ると見

ゆ。僅かの産額のよしなれども、実に美麗なる日本紙を見たり。色は外国にては少しついで居るのを好むよし。耳なども断たずして送る。骨董的にハンドメイドを喜ぶ也。」

とあります。ここは鉄道に近いので原料はパルプと三極を主とし、静岡・若狭・美作あたりからも三極を買うようになってきて、その点では東海地方の形態に近づいています。動力利用そのほかの近代化には、由利公正氏のような有力者の奨励があつたことですが、⁽²⁵⁾ただ一つ、東海地方とちがっていたらしいのは、さきの帳紙にしても、奉書や局紙にしても、すべて特定の需要と結びついて、細いながら安定した生産形態をとろうとすることでした。これが、高岡の銅器、金沢のまき絵や箔の製造、さらに輪島の漆器、極端なことをいえば富山の薬品などまでも、行商を通じたトクイ先との結びつきなどの、固定市場への販売という形式をとり、⁽²⁶⁾工芸品化の傾向をもつという、北陸地方の工業生産の志向を示すものではないでしょうか。つまり、北陸地方の大多数の在来工業の企画者たちは、不特定多数の販売市場を予想する近代的な工業生産とは、この点ではつきりちがった企業精神をもつものであつたといえるのではないかと考えるのです。

「一体に此地方は肥料計算の胸算用がちつとも発達して居らず」と、「北国紀行」の中で柳田先生は驚いています。これと、「例えば愛知県の如き、交通の便利な、小農の金勘定に鋭敏な村落」とが、「産業革命の進行中における日本の中に、同時に併存していた」ということは、歴史地理的な研究においては無視しえない要素といえます。そのような地域住民の時勢に対応するしかたのちがいが、数十年後の両地域の姿貌に全く無関係だつたとは思われません。しかも、このような要因によって、はつきりした差異が実現した時期には、既にその起因をつくつた人々は他界し、たずねるにあとなしということになるかもしれないのです。この種の要因を、何かはつきりした形でとらえる方法はない

ものでしょうか。

- (1) 小川琢治…「第二十世紀の初に於ける日本」を読む 地学雑誌一六年一八七号(一九〇四)
- (2) 谷津昌永…日本之雪 地学雑誌二二年二五五号(一九一〇)
- (3) 小西正二…戦時中に於ける我工業の発達状況 地学雑誌三一年三六九—二七一号(一九一九)
- (4) 太田勇…岳南地方の工業化 地理学評論三五卷九号(一九六二)
- (5) 鉄道院…本邦鉄道の社会及経済に及ぼせる影響 中卷(一九一六)
- (6) 伊藤喜栄…わが国における羊毛紡織業の立地について 人文地理一二卷四号(一九六〇)
- (7) 三浦総子…名古屋の陶磁器工業について 人文地理一二卷一号(一九六〇)
- (8) 農商務省商務局…各府県重要商品調査報告(一九一二)
- (9) 前掲三浦論文(7)
- (10) 藤森勉…岐阜縮緬の展開と立地条件 人文地理八卷四号(一九五六)
- (11) 大西青二…越前漆器工業 人文地理五卷一号(一九五三)
- (12) 農商務省前掲報告(8)
- (13) 横山源之助…日本之下層社会(一八九八) 農商務省商工局…織物職工事情(一九〇三)
- (14) 東畑精一…日本農業の担い手 日本農業発達史第九卷(一九五六)
- (15) 千葉徳爾…地理学と日本民俗学との接点 人文地理一五卷三号(一九六三)
- (16) 柳田国男…時代ト農政(一九一〇)
- (17) 柳田国男…北国紀行(一九四八)
- (18) 横山前掲著書(3) 小倉倉一…米作ニ関スル府県令解題 日本農業発達史第四卷(一九五四)
- (19) 日本農業発達史第九卷(一九五六)
- (20) 農商務省商務局 時局ノ工場及ビ職工ニ及ボンタル影響(一九一九)
- (21) 柳田前掲著書(7)
- (22) 農商務省前掲報告(8)
- (23) 鉄道院前掲報告(5)
- (24) 柳田前掲著書(17)
- (25) 鉄道院前掲報告(5)

(26)

植村元覚・行商圏と領域経済(一九五九)

柳田国男・旅行の話(一九一六) 柳田前掲著書(17)